

報 会

復 刊 第 1 号



セバスティアン・ミュンスター『コスモグラフィア』（ca.1552）中表紙挿絵

京 都 大 学 地 理 学 談 話 会

1 9 9 0

復刊に際し

先年、改築にそなえて旧陳列館のかつての地理学教室を整理していたとき、書棚の奥から小さな冊子が出てきました。それは白表紙にガリ版刷りでただ「會報 I 1934」と書かれただけの本文17ページの小冊子でした。内容は、一、談話会報告要旨、二、教室日誌、三、研究室雑記、そして後記へとつづき、最後は「昭和九年七月 京都帝国大学地理学教室 地理学談話会」となっています。後記には、幹事 — 研究室雑記が米倉二郎先生の名で書かれていますので、おそらくは同先生のことと思われます — の名で「始めての事として満足なものが出来ませんでした。特に急いだためリーフレットの題名等も当方で勝手につけました」と記されています。とすると、この小冊子は、地理学談話会が始まって以来最初の会報ということになります。以後、それが何号つづいたのかは分かりませんが、第1号が残っているかぎり、創刊されたことだけは間違いないでしょう。本号を復刊第1号と名づけたのは、それに因んでです。

会報の復刊を考え、大学院生の人たちにその編集を依頼したのは、かねて文学部以文会が発行している「以文」の教室だよりの欄でお知らせしてきましたように、流行語的な言い方をすれば、談話会をもっと活性化することができればとの願いからです。このような会報を発行することにより、教室のことや、新しく卒業した人たちがどのような方向に進んでいったのか、またどのような学生が新専攻生としてやって来たのかなどについてよりくわしくお知らせすると同時に、会員の方々からも近況や随想をお寄せ下さったりして、相互のネットワークづくりにお役に立てればと考えるからです。



「會報 I 1934」表紙

この会報の復刊を機に、談話会の運営について変更を一つお願いしたいと考えています。それは、従来、談話会の主催でおこなってきた新入生歓迎会を、在学生主催に切り換え、学生同志の自由な交歓と親睦の場としての役割を重視させていただきたいとのお願いです。その他の談話会の運営や会合については、従前どりの方法を踏襲したいと思っていますが、これらについてもより前進のためのご提案をいただければ幸いです。

1910（明治43）年に最初の卒業生を送り出したときに地理学談話会が生まれたとすれば、今年は満80年を迎えることになります。しかしその一方では本年2月に小牧實繁先生がお亡くなりになりました。この号には浅井辰郎先生からいただいた随想とともに、織田武雄先生による告別式での弔辞を掲げなければならないのは悲しいことです。しかし先生も地理学談話会報の復刊をお喜び下さっていることでしょう。会員の方々のあたたかいご支援によって、本会報がいわゆる3号雑誌に終ることなく発行されつづけることを念じて止みません。

（応地利明）

追悼

本年2月に小牧實繁先生がお亡くなりになりました。つきましては弔文を小牧家ならびに織田武雄先生のお許しを得て、原文通りここに掲載させて載きます。

小牧先生 かつて京都大学において先生の御薫陶に浴しました門下生を代表致しまして 謹んで御霊前に追慕告別の辞を述べさせて載きます 先生は昨年卒寿を迎えられ御病床にあらせられました が 御見舞いに参りますと 懇々病院の玄関まで御送り戴くほど御元気で 今年も御長寿を重ねられることゝ信じて居りましたが 俄かの御逝去に 違い ただただ痛惜の念に堪えません

昭和四年 先生がフランス留学から御帰国になり 京都大学助教授としてはじめて講壇に立たれ 私はその最初の御講義を受ける幸運に恵まれましたが 講義演習ばかりでなく 毎学期の地理巡検旅行にも御指導を賜わり また先生の御宅に遅くまで御邪魔して 奥様から度々手厚いお持てなしを受けましたことなどを回想し 無量の感慨を覚えるので御座います

先生は終戦後 京都大学を辞されましたが 昭和二十七年には再び滋賀大学教授に迎えられ 同三十四年には全学の要望によって同大学の学長に選出され 昭和四十年御退官になるまで 二期六年に亘る学長の重職を全うされました

さらに御退官後も京都学園大学に出講されるなど 京都大学の講壇に立たれて以来 五十有余年にわたって大学教育に尽瘁されました御功績によって 昭和四十四年には勲

二等旭日重光章を拝受されました。またわが国の地理学の発展には早くから国際地理学会に御出席されるなど、多大の貢献をされましたが、なかでも先生の学位論文「先史地理学研究」はわが国の先史地理学、歴史地理学の研究に確固たる基礎を与えられました。しかも先生の御研究の領域は地理学に止まらず、多年に及ぶ御郷里滋賀県全域の民俗探訪、あるいは「比叡山文化総合研究会」を主宰し、延暦寺より刊行された「比叡山」および「葛川明王院史」を編纂されるなどの御業績を通じて、昭和五十九年には滋賀県文化賞も授与されました。

今、先生とは幽冥界を異にすることになりましたが、私たち門下生一同は先生の悠揚迫らざる温容を偲び、心からご冥福を御祈り申し上げます。

小牧先生、どうか安らかに御眠り下さい。

平成二年二月二十日

門下生を代表して
京大名誉教授 織田武雄

《随想》

時に地理的発想を

浅井辰郎

1. 最近の政府発表では、全国の大都市にある未・低利用地を転換して住宅100万戸を作る、農地に宅地並み課税をして農地を吐き出させる、と言う。後追い行政とセクショナリズムを性とする官庁案としては、むげに貶す訳にも行かないが、せめてそれが国の総合施策として、将来とも最上だと言える論拠なり哲学なりを示して欲しい。なぜならこれを実施すればもうその農地は永久に戻って来ず、これに示される農業軽視政策は、ひいては一握りの外国籍米業者の利益のために日本が主食まで輸入する植民地に転落する恐れ、太陽の下に耕作する健全な農民魂を日本人から奪い取る恐れ、を感じさせるからである。

私は現在を、産業革命に始まる日本や世界の僻地に起きた過疎化と人口の大都市集中とを、根本的に方向転換させる転向点だと考える。その技術的根拠は、一方にハイテクによる情報・通信手段の大躍進が、他方に新幹線・高速私鉄・地下鉄、モータリゼーション、バス・トラック輸送と道路整備とがあって、職・住の地方都市定着や遠距離通勤・物資輸送が着々と実現していることである。

この方向は今までは民間主導であったが、これを基礎に各省庁の横断的政策を確実大量に実施することを私は願っており、冒頭の政府案はこの根本を忘れたものとして返けたいのである。その政策経費のためには、現、大都市の企業や住民に対して、その利便さに応じた都市税の時限立法も已むを得まい。そしてこれに並行して、過疎地域と大・中都市との一体的政策をも採るなら、嫁も来ず、子供が滅

り、廃校が増える日本の過疎農村も、一転して昔日のように復興するであろう。

この一体的方式が世界各国に普遍化し、職場の確保、教育の普及、民族・宗教問題の鎮静化、国境制度の緩和などが伴えば、各国大都市への夥しい人口流入は減少し、僻地開発も進んで食料自給は増え、世界の人口増加を総計100億人位までは吸収できるであろう。

2. 資本主義的な利益優先盲目経済によるCO₂の増加と地球の温暖化・海面上昇、ほぼ同じ原因による資源枯渇と公害蔓延に対して、日本は先日国際会議で米国の消極派に同調し、両立論を展開して、国内対立と西欧並の政治哲学さえ持たないことを露呈した。

私は世界が緊張を緩和してきた今、日本が幸いに世界第2の経済大国なら、世界に先駆けてこの盲目経済の罪禍を指摘し、経済の轉換成長とアジアの恐れる軍備の、縮小とを、遠慮なく宣言すべきだと思う。そして通産省は一時、目をむいても、徹底した資源のリサイクル経済体系、鑛物など有限資源開発税の新設による最小限の資源開発、太陽熱・地熱・風力・排熱など天然エネルギーの十分な活用、高能率な蓄電池、膨大な潜在力を持つバイオ・海流発電・安全な核融合利用への大規模な研究投資などを、率先して実行し、世界に向けて同調者を求めるべきだと思う。

3. 東京都は今、ウォーターフロントの建設に血の道を上げている。それは一部の科学雑誌に何の疑問もなく取り上げらる程であるが、果して大地震時の液状化現象や倒壊に耐えられるであろうか。沖積地のこの種の大災害は、かつての新潟地震、近くはサンフランシスコ地震に明白な例がある。それらを教訓として東京都は液状化地域予測図を作ったと言い、建設企業は工法に大きな自信を示しているが、私はとてもまだ信じられない。そしてこの流行が、同じような沈降性低地から出来ている名古屋、大阪、新潟などに拡大したら、被害はいかばかりかと肌粟を生じる。

東京湾沿岸の沖積層は、そこの沈降性と古東京川の谷のために、所により数十メートルの厚さがある。それもシルトから砂礫までの互層をなし、建物が高くなり基礎が深くなるほど危険は増大するはずである。このほかにも考えるべき2つのことがある。第1は上記の海面上昇が2メートルにもなれば、ここは真っ先に使えなくなる地域であり、第2は計画されている建物はいわゆるインテリジェントビルが主で、瞬時の活動停止も許されず、大地震で破壊されれば、日本の経済活動に壊滅的打撃を与えること必定である。こう見ると目先の土地不足、計画の容易性などに惑わされて、わざわざ危険千万で半ば流行的な、ウォーターフロント開発にのめり込むのは、飛んで火に入る虫の観がある。

以上3点、最近の偶感を、僅かな地理学的知識をもとに開陳した。文面では法律名や定量的論理が不足しているが、それらは一部揃っている。説得力に欠けようが、それはいいではない。これらを要約すれば、「政治よ、もっと地理学的視点に立て」ということである。地理学には本来応用

的使命があるものだが、真理探求を主とする大学宛に、こんなことを書くのは逡巡を覚える。しかし強い偶感に押され、敢えて書いた。もし同感の方が居られればこの上なく嬉しい。

《研究室のページ》

新専攻生自己紹介

本年度も12名の新専攻生を迎えました。各自に一言ずつ自己紹介して戴きました。

* 石村 裕輔 *

じつは、僕は、あと英語を4つ、独語を3つ、とらねばならないという状況を抱えながらやってきた大馬鹿です。追いつめられなければ何もしないタイプの人間ではありませんが、今回はかなり厳しく追いつめられてしまった。まあ専門の科目と共に頑張るつもりですのでよろしくお願ひします。

* 浦田 和明 *

私は現在、クラブ（器械体操）とアルバイトに追われる毎日ですが、時間を有効に使い、この2年間を自分で納得のいくように勉強したいと思います。ただ、地理学については全くの無知なので、それが心配です。

* 江崎 健治 *

自分は、体育会ウィンド・サーフィン部に入っております。日焼けのために、ちょっと色が黒いです。しかし、人文地理学に関しては、まったく、まっしろの状態なので、おてやわらかにお願いします。

* 大島 健司 *

S44. 6.20生 0型

サークル：グッドサマリタンクラブ（外国人の観光案内）
地理同好会

趣味：旅行、サイクリング、水泳、映画鑑賞、文化比較
性格：楽天的、淋しがり屋

こんな私ですが、よろしくお願ひします。

* 大野 宏 *

1987年、大阪府立北野高校卒業後、京大文学部入学。昨年一年間を休学し『海外遊学』と称して欧州を半年放浪。今年から学校に復帰。歴史地理学の成果と現代社会を関連づけて展開できれば、と思っています。

* 渋谷 良治 *

はじめまして。渋谷良治です。初対面の方とお話するのは苦手なので、そちらから気軽に声をかけて頂けたら幸いです。やがて慣れてくると、今度はうるさいと思うほどしゃべります。こんな私ですがよろしくね。

* 竹内 渉 *

今年から工学部から転部してきました。出身は札幌北です。陸上部で長距離をやっていますが、今年は忙しくて、あまり走れそうにありません。哲学の授業などは今までと毛色がちがうので戸惑っていますが、何とかやっていこう

と思っています。

* 中藤 容子 *

早いもので、もう三回生。自分の考えるがまま、思うがまま、運命のなすがままに生きてきたら、ここに自己紹介を書く身に……。こんな時代の流れの早さに、耐えきれないギャップを感じることもしばしばで、そんな時は、陽をいっぱいに浴びながら、気の向くままに散策し、ボーとする。やりかけのことを放り出して、愛車ランドナーと共に、暫く姿を消すこともあるかもしれません。

* 御手洗央治 *

御手洗央治、彼は延岡で生まれ、倉敷、そして富士で育った。高校時代は柔道に汗を流す毎日だったそうだが、バツとしなかったらしい。今は、バイクでどこかに駆けていくのが一番の楽しみとのことだ。

* 山本 輝志 *

1988年、鹿児島県立鶴丸高校卒。京大卒の校長に憧れて文学部へ。更に地理教師の影響を多分に受けて、人文地理を専攻することになった。今のところ、都市地理学や、エリア・スタディといった分野に興味あり。

* 横田 晶彦 *

私は、生まれた病院から幼稚園、小学、中学、高校とすべて京都市内でして、正真正銘の京都市人です。大学もその勢いで京都市内にあるのを選びました。結構ルーズですが、中学と高校の6年間皆勤という過去の栄光をもっています。

* 六島美也子 *

六島美也子、20才。民族舞踊研究会というわけのわからんサークルとバチンコ屋さんのバイトにあけくれる毎日です。また、木津という誰も知らない田舎から通ってまして、遅刻、いねむり等なにとぞご容赦下さいませ。なんてね。

卒業・修了者の進路

・昨年度の学部卒業生全7名の進路は以下のとおりです。

亀岡 岳志 文学部聴講生

北口 卓美 NEC（日本電気）

児玉高太郎 JETTORO（日本貿易振興会）

新谷 泰久 新日本製鉄

津賀 健司 野村不動産

柳下 信宏 生活クラブ生協

塚本 誠 農学研究科熱帯農学専攻修士過程

・昨年度の大学院修了者の就職先は以下のとおりです。

小長谷一之 大阪府大総合科学部助手 1989年12月

小田 匡保 駒沢大文学部講師 1990年4月

（敬称略）

1990年度講義題目

講義 助教授 金田章裕 人文地理学序説

〃 教授 応地利明 地域環境学概論

*研究 教授 応地利明 都市核構成の比較研究

* 研究	助教授	金田章裕	古代・中世の景観と土地計画
* //	東南ア 研教授	高谷好一	東南アジアの景観
* //	教養部 教 授	足利健亮	歴史地理学における「資料」 批判
* //	教養部 教 授	青木伸好	地理空間の認識方法上の 諸問題
* //	教養部 助教授	山田 誠	辺境都市の研究
* //	講 師	矢守一彦	地図史と歴史地理
* //	講 師	成田孝三	都市発展の段階仮説
* //	講 師	須原美士雄	商業地理学の諸問題
* //	講 師	岡田篤正	活断層を主とした変動地形学 (集中講義)
演習	教 授	応地利明	地理学研究法
	助教授	金田章裕	(3回生対象)
演習	教 授	応地利明	人文地理学の諸問題
	助教授	金田章裕	(4回生対象)
講読	教 授	応地利明	フランス地理書講読
//	助教授	金田章裕	ドイツ地理書講読
* //	人文研 教 授	狭間直樹	中国書講読 (現代史学と共通)
実習	講 師	森 三紀	地理学実習
	助 手	松田隆典	

△演習 教 授 応地利明 地域の諸問題
 助教授 金田章裕
 *印は大学院と共通
 △印は大学院のみ

《関東支部便り》

関東支部の流れ

—昭和10年代以降—

浅井得一

在京の京大地理出身者が年一回位づつ集まるようになったのは、昭和10年代だったと思う。熱心な村松繁樹氏が勤務先の学習院の研究室で開催した。少人数ではあるが誰かが発表し、皆が批評し合うという真面目な会で、浅井得一「関東地方諸都市の人口増減について」(地理叢書第10輯、1939)も、こうした討議を経たものである。また野火止用水方面に巡検に行った事も思い出される。この会は戦中戦後暫く中止していたが、村松氏西下の後は、内田寛一氏の指導もあって再開され、京大の織田武雄氏のお許しもあって地理学談話会の正式な下部組織になった。

この頃は、久し振りに会って無事を喜び、お互いに助け合う時代であったので、昭和30年代までは主に飲む好機として喜ばれた。その後は京都・東京の連絡を密にするために、日本地理学会大会時に開催して、老若多数の参加を得

たことは誠に有意義だった。同じ趣旨から京都での慶弔に会員が出席したり、昭和50年代からは、関東地方就職者の歓迎会を開き、併せて食事の前に地理屋さんらしい行事をするようになった。これは今後も主流を占めよう。なお、会が古くなると会員の逝去・葬儀も出て来て悲しい面もある。別表参照。

現在、関東支部の範囲は以前より狭くし、東京都と神奈川、埼玉、千葉の3県だけであるが、会員数は結構41名もいる。問題は二つあり、一つは戦後20年間くらいに較べて、今は出席者がやや少なくなった事、二つは後継幹事が未定な事である。前にこの提案をしたこともあるが、まだ実らない。得一は77歳、補助役の辰郎は76歳で、いつ鬼籍に入るかも分からない。若い方々、どうか自選他薦で宜しくお願いします。談話会支部とは、空気のようなもので、握めないけれど、なかなか意味のあるものだから。

(1990,4,30.)

地理学談話会関東支部略史(戦後)

西暦、月日	事 業	人数
'51, 1, 6.	新年会(内田、下田、藤田氏ら)	17
'59, 11, 11.	小牧實繁先生歓迎会(内田、塚本氏ら)	18
'66, 1, 21.	新年会(浅井辰郎帰朝報告会)	14
'68, 4, 7.	法政大で日本地理学会大会中の談話会 「秋岡先生古地図展」カバーガラスに、 池田光二氏の尽力絶大	41
'69. 9, 28.	内田寛一氏逝去	
" "	下田礼佐氏逝去	
10, 1.	内田氏葬儀：自宅	
10, 2.	下田氏葬儀：千日谷会堂	
12, 16.	藤野義明氏逝去	
19.	同氏葬儀：自宅	
'71, 6, 20.	織田武雄氏退官記念祝賀会へ参加	5以上
'72, 4, 3.	駒沢大で日本地理学会大会後の談話会	23
'73, 12, 23.	池田光二氏逝去	
'74, 1, 10.	同氏葬儀：青山斎場	
'76, 12, 27.	忘年会(和田俊二氏歓迎会?)	14
'77, 12, 18.	木下 良氏歓迎会	?
'78, 12, 25.	安仁屋政武・緒方宗秋氏歓迎会	13
'79, 8, 23.	古沢三郎氏逝去	
'80, 4, 3.	村本達郎氏夫人房子さん逝去	
5.	同氏夫人葬儀：自宅	
'82, 5, 23.	室賀信夫先生納骨：宗参寺(新宿区)	8
9, 19.	川上喜代四氏逝去	
22.	同氏葬儀：東福寺	
'83, 3, 1.	三友国五郎氏逝去	
3.	同氏葬儀：自宅	4
'84, 6, 18.	半身不随の伊藤博氏見舞い。現在は 病状やや好転	
10,	川喜多氏、比島マグサイサイ賞・日本 能率協会賞	

'85, 6, 9,	野間三郎氏叙勲祝賀会	8
11, 15.	小牧實繁先生米寿祝賀会へ参加	5以上
'86, 5, 25.	浅井得一・神尾明正叙勲祝賀会	10
'87, 10, 4.	尼子雅一・岡本美津子氏歓迎会	13
11, 12.	柴田孝夫氏夫人文子さん逝去 葬儀：竜泉寺	
'88, 1, 15.	西山敬次郎氏逝去	
4, 1.	青山宏夫氏、新潟大学へ転勤	
//	石川栄吉氏、中京大学へ転勤	
//	飯田博氏、大阪へ転勤	
6, 19.	白石秀俊氏歓迎会 ビデオ「ヘイマエイの 噴火」、「ネパール援助」鑑賞	10以上
//, //.	大橋英男氏、東京いすゞ自動車K. 会長就任	
'89, 5, 4.	浅井得一氏夫人禎子さん逝去	
6.	同氏夫人送葬式	
6, 25.	鈴木伸国、江口貴之、林克子氏歓迎会と 川上健三氏の日ソ漁業交渉史および 竹島史談	11
7, 19.	和田俊二氏逝去 叙勲	
22.	同氏葬儀：東福寺	
'90, 2, 20.	小牧實繁先生ご葬儀へ参列	5以上

この表は短時日の間に諸名簿、諸地理学雑誌、日記、記念写真、手紙、電話などを駆使して作り、一部は得一氏が追加。曖昧な所には？を付けたが、抜けた所は不明。どうぞご教示下さい。（浅井辰郎）

1989年度（1989年4月～1990年3月）

地理学談話会 会計報告

【資金会計】

<収入>

年会費	152,000
銀行口座利息	110
前年度繰越	317,968
計	470,078

<支出>

運営費への振替	169,089
郵便振替手数料	4,560
次年度繰越	296,429
計	470,078

【運営費会計】

<収入>

資金会計からの振替	169,089
新専攻生歓迎会会費	121,500
秋季懇親会会費	245,000
論文発表会会費	174,000
計	709,589

<支出>

新専攻生歓迎会経費	127,965
秋季懇親会経費	244,997
論文発表会経費	182,073
郵送料	94,554
名簿作成準備費	37,000
小川先生浮彫掲額工事費	23,000
計	709,589

今年度は経常的支出に加えて、名簿発行費、会報発行費、石橋先生肖像画修理費などが計上されますので、来年度への繰越は大幅に縮小される予定です。

お知らせ

1. 本年度、会報と一緒に名簿を発行致しましたが、以下の会員の方の住所、連絡先が不明です。お心あたりの方は地理学談話会（京都大学文学部地理学教室）までご連絡下さい。また、これらの方以外で勤務先等部分的に不明の方についても、お心あたりの方はご連絡下さい。

括弧内は卒業年（昭和）、敬称略。

有馬もりよ（33）	田島 渡（23）
今井 平八（19）	都子 廬（15）
岡本 靖一（42）	西沢 仁晴（49）
小坂 忠雄（47）	野田 茂生（36）
神坂 至（5）	原 剛（45）
詫間 洋二（54）	福田 新一（46）

2. 尚、談話会年会費 1,000円をお支払い下さい。

編集後記

地理学談話会報復刊第1号はいかがでしたでしょうか。旧会報などを参照しながら、復刊にふさわしい体裁を整えたつもりですが、不十分な点多々あったのではないかと存じます。会報のあり方について忌憚なきご意見をお待ちしています。そして、今後この会報が会員相互の交流の場としてますます発展していくことを期待しています。末筆ながら、ご寄稿いただいた先輩方はじめ会報の編集にご協力いただいた研究室関係者に対し、この場をかりて厚くお礼申し上げます。（山近博義、山崎孝史）

会 報 復刊第1号

発行日 1990年 5月20日

発行者 地理学談話会

〒606 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部地理学教室内

TEL 075-753-2793（直通）

振替 京都 8-21457